

鹿大のチカラ

KAGOSHIMA UNIVERSITY

理学部

身近な昆虫、アリ。世界中に約1万2千種が生息しているとされる。この数は名前が付いたアリだけ。実際にはその倍近くの種類が地球上に存在しているという。

県内に目を向けると、本土だけでなく100種以上が生息。体は小さいが存在感は大きいアリの、環境と地史の視点から研究を続けているのが山根正気教授

地球環境科学だ。世界のどんな地域に、どんな種類のアリが生息し、そのアリの社会構造は……。解明されていない部分が多い分野だけに、研究テーマは尽きることがない。「生態系の中でアリが果た

山根正気 教授 (61)



す役割は極めて重要なんです。他の生物を捕食するアリは、食物連鎖の中で欠かせない存在なのだ。

一方で、植物や他の昆虫と共生するのが大きな特徴。例えば、アリの巣などにはアリツカコオロギやハエの一種など異種の昆虫が生活する。えさの集め方もユニーク。植物の種子を集めるアリもいれば、別の種類のアリの巣だけを襲う種類もいるという。

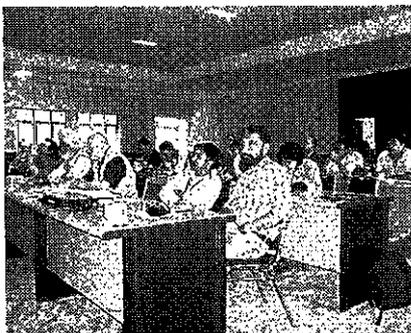
アリの多様性

だが、明らかにになっているアリの実態は氷山の一角。東南アジアのアリの実態を深く探ろうと、山根教授を中心にとしたアリ研究者のネットワーク組織「ANET」が1999年に発足した。アリだけに限った研究者組織は世界的にも珍しい。アジア諸

アジアの研究者が連携

国が生物の生態研究分野でリードし、発展途上国の若い研究者を交えた共同研究の場にすることを目的に設立された。

ANETの事務局はマレーシア・コタキナバルのサバ大学にある。東南アジアや欧米など15カ国約100人の研究者が参加。研究者間で自然発生的に生まれたグループが、それぞれのテーマに取り組み。「生物の生態研究は従来、欧米が先行してきたが、アジアの研究はやはり



アジア人がリードすべきこと。ANETはその第一歩となつた。

設立11年。ANETからは目に見える成果が生まれている。参加者が対等な立場で標本や研究成果を共有できるように、本格的な「アリ・コレクション」(アリの標本)がタイやマレーシアなど東南アジアの国々で作られた。また、若手研究者が英文で論文を書く訓練の場として国際的なア



インドネシアで開かれたANETのワークショップ&セミナー。各国のアリの研究者がそれぞれの研究成果を発表した。2009年11月、スリランカ・ケラニヤ大学で行われた、アリの標本作りに関する講義風景。01年4月、いずれも山根教授提供

り雑誌が2007年に創刊。「欧米でも通用するような内容の論文を発表できるように」と編集部はドイツの大学に置いた。ゆくゆくは世界のアリ研究をリードする研究者がアジアから誕生することを期待している。

「生態系におけるアリの役割を探ろうと飛び込んだアリの研究だが、そのためにはアリの分類・分布を把握しなければ前進めないことに気付いた。何十年以上もかかる難作業だが、生物多様性の保全という最終目標に向け、一つ一つ研究を進めていきたい」

昨年、鹿児島大総合研究博物館で「小さなアリの大きな世界」と題した展示会を開催し、好評を得た。反響を見て常設展示できないものかと考え始めていた。「研究成果を身近に楽しめるスペースがあれば、よりアリへの関心が高まり、ベールに包まれたアリ研究の追い風になるかもしれない」